ＬＣセンターニュースレター

息抜きの散歩道 26号

発行者：日本工業大学ＬＣセンター(図書館)　埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1

発行日：2026年10月15日

今年もやります！特設書林

2022年から開催している「学内選書会 特設書林」は、2026年で5回目となります。今回は初の2日連続開催で、会場は、初心に帰りＬＣセンター１階ギャラリーに決定しました。
皆さんが選んだ図書やDVD・Blu-rayがＬＣセンターに加わります。アンケートにご回答いただいた参加者には、おみやげも用意しています。多くの方のご参加をお待ちしています！



LCセンターに入れたいDVD・ブルーレイ投票
ウィキッド　永遠の約束
近畿地方のある場所について
推しの子 The Final Act
秒速５センチメートル
ジュラシック・ワールド　復活の大地
宝島
ズートピア2
ベイマックス
クスノキの番人
King Gnu Dome Tour THE GREATEST UNKNOWN at TOKYO DOME

図書館で地震が起きたら





2026年8月23日に発生した、震度5強の地震により、ＬＣセンターでは、図書の落下（7階1,061冊、9階171冊）、書架の破損、照明の破損などの被害がありました。
館内で地震があると、このように図書の落下や書架の破損で思わぬケガをする場合があります。地震の際はバッグなどで頭を守り、書架から離れましょう。

マンガはじめました。



主に先生方が選んだマンガを、ＬＣセンター１階ブックラウンジＢの書棚に並べました。
どんなタイトルがあるかは、来てのお楽しみ。

なお、マンガは貸出できません。館内で楽しんでください。詳細は書棚上のポスターをご覧ください。
皆さんの来館をお待ちしています！

特集展示（ブクログ）
ブクログでは特集展示のブックリストをご覧いただけます。「カテゴリ」で特集展示を選択してください。

青塔（リポジトリ）
LCセンター発行誌です。教職員の皆さまにご寄稿いただいています。

ライブラリーサポーター
LCセンターの学生ボランティア「ライブラリーサポーター」を募集中です。興味のある方は2階カウンターにお越しください。

ＬＣセンターだより

最近、「毎日同じことの繰り返しだな」と感じることはありませんか。実は、友達との会話や授業での気づきなど、何気ない日常には発見がたくさんあります。本は、そんな発見を広げてくれる身近な存在です。今年も、学生の皆さんが図書館に置いてほしい本を選書する「特設書林」を開催します。息抜きのつもりで気軽に参加してください。たまにはスマホを置いて、本棚の間を歩き、新しい本との思いがけない出会いを楽しみましょう。

ＬＣセンター　塩入 修

LCセンターホームページ

250文字ブックレビュー

図書委員の先生方から、おすすめ本の紹介です。

『江戸切絵図散歩』　池波正太郎/著　新潮社/刊　出版年：1993年12月

知らない街を歩くときでもスマホが道案内をしてくれる時代ですが、本書を読むと地図を片手に歩きたくなります。街角に息づく歴史と文化の香りを楽しみながら、歩いて食べて一休みして。本書には、私たちの暮らす令和の向こうに江戸や昭和が重なる感覚を味わうヒントがあふれています。神田キャンパスや駒場キャンパス付近の切絵図や絵画も掲載されており、俎板橋（現在の俎橋）といった文字を見つけるだけでも、まるで時空旅行をしているような気分になります。読書の秋、運動の秋、食欲の秋。散歩のお供にいかがでしょうか。

機械工学科　中野　道王

『2034 未来予測― AI（きみ）のいる明日』　中島 聡/文　徳間書店/刊　出版年：2026年2月

2034年、あなたの仕事は残っているだろうか。本書は、AIやロボットが社会を大きく変えた未来を、単なる技術解説ではなく、そこで暮らす人々の姿を小説のように描きながら紹介します。物語を追ううちに、2034年の社会が遠い未来ではなく、少し先の自分たちの現実として見えてきます。

便利で豊かな「天国」になるのか、役割を失う「地獄」になるのか。未来を考えるきっかけとして、これから社会に出る学生の皆さんに、ぜひ読んでほしい一冊です。

電気情報工学科　平栗　健史

『流れる星は生きている』　藤原 てい/著　中央公論新社/刊　出版年：2002年7月

本書を初めて読んだのは、今から約30年前、1995年頃のことだった。戦争が終わったころ、中国にいた著者の藤原ていが、幼い3人の子どもを連れて日本に帰るまでの、本当にあったお話。食べ物もなく、寒さや病気に苦しみ、何度も命の危険にさらされながら、長い道のりを歩き続ける。子どもたちを守ろうと必死に生き抜く母親の姿に心を打たれる。戦争が終わっても、人々の苦しみは終わらなかったこと、そして家族の絆や命の大切さを教えてくれる。戦後のベストセラーとなった作品で、今なお私の心に深く残っている一冊である。

環境生命化学科　白木　將

『ホモ・デウス テクノロジーとサピエンスの未来』　ユヴァル・ノア・ハラリ/著　河出書房新社/刊　出版年：2018年9月

『サピエンス全史』の続編となる本書は、サピエンス(人類)の未来を描いた一冊です。著者によれば、かつて脅威だった飢餓や病、戦争をほぼ克服した人類が次に目指すのは「不死・幸福・神化」。しかし、その鍵を握るAIやバイオテクノロジーの急速な進化は、人間の「自我」という概念を根底から揺るがし、圧倒的な処理能力を持つシステムへと主権を委ねる「データ主義」の到来を予言します。超人へと進化する一部のエリートと、価値を失う大半の人類…。テクノロジーに翻弄される人類の命運を鋭く問いかける、恐るべき未来論の1冊です。

ロボティクス学科　中里　裕一

『俯瞰する知 ： 原島博講義録シリーズ』　原島 博/著　工作舎/刊　出版年：2024年4月（全10巻：刊行中）

大学では「専門を深く学ぶ」だけでなく、「世の中を広く見る」ことも大切です。『俯瞰する知』は、東京大学名誉教授・原島博先生の講義をまとめたシリーズです。情報技術、科学、歴史、哲学、芸術、文化など、幅広いテーマを横断しながら、「そもそも〇〇とは何なのか？」を考えます。専門分野の枠にとらわれず、広い視野から世界を眺める事で、新しい発見や興味が生まれます。また自分の専門や将来について深く考えるきっかけにもなる一冊になると思います。

情報メディア工学科　杉森　順子

『このオムライスに、付加価値をつけてください』　稲内 尚文/著　ポプラ社/刊　出版年：2025年3月

書名からマーケティング論を連想しましたが、単なるビジネス書以上の内容を期待して読みました。既存価値、付加価値、不要価値という三つの価値を軸に、モノやサービスだけでなく自分自身の価値を高める意義と方法が語られています。どこから読んでも理解でき、また「仕事で言われたことだけをやるのではダメな理由」のような見出しから内容を予想する、頭の体操的な読み方もできます。付加価値化技術の一つ、「再定義化」から、プログラミングのオーバーライドの思想（既存の価値を保ちながら新しい価値を加える）を想起しました。

データサイエンス学科　北久保　茂

『建築のかたちと金融資本主義：氷山、ゾンビ、極細建築』　マシュー・ソウルズ/著　草思社/刊　出版年：2025年2月

今世紀に発達した金融資本主義では、あらゆるモノが金融商品化されることで投資家や株主によるマネーゲームの道具となり、その論理の下で歪な形の建築や都市が生み出されているというのが著者の主張である。そのメカニズムからすれば、日本におけるタワマンの林立、都心家賃の高騰、空き家の増加なども影響下の現象と理解される。さらに戦後に発達した分譲マンションや郊外開発などにも同質の手法があると気付く。本書で採り上げるのは、北米、欧州、中国の事例だが、現代日本の都市や社会のありようについても再考させられる内容である。

建築学科　安野　彰

『リベラルとは何か 17世紀の自由主義から現代日本まで』　田中 拓道/著　中央公論新社/刊　出版年:2020年12月

二十一世紀以降、世界的に左派政党の得票率が急落している。この傾向は日本においても同様で、リベラルに対する不支持が顕在化している。本書によると、リベラルとは「価値の多元性を前提として、すべての個人が自分の生き方を自由に選択でき、人生の目標を自由に追求できる機会を保障するために、国家が一定の再分配を行うべきだと考える政治的思想と立場」である。元来リベラルは人々からの指示を得られる可能性を有している。本書は歴史的・政治的観点からリベラルを考察し、リベラルとは何か、その価値を改めて問い直している。

共通教育学群　一瀬　厚一